

# 『シャーリー』におけるヴィクトリア朝時代の女性像

堀 出 稔

## The Feminine Images of the Victorian Age in *Shirley*

Minoru HORIDE

シャーロット・ブロンテが小説『シャーリー』に着手したのは、1847年、『ジェイン・エア』出版のすぐ後であった。『ジェイン・エア』において彼女は、1人の女性の少女時代、青年時代そして結婚に至る苦難の歩みを通して、内面的な心の葛藤と成長過程を描いたといえる。一方『シャーリー』においてシャーロットは、視点を広く社会に向け、その時代の動向に影響を受けつつ人生を歩む女性達をテーマにしていった。この変化は、シャーロット自身元々社会や政治の動きに関心があったという理由もあるが、当時社会的意識を背景にして小説を書くことが広まっており、その影響も考えなくてはならない。この小論においては、『シャーリー』の創作状況及び作品の時代背景、『シャーリー』に登場する女性達、特に主な人物キャロライン・ヘルストンとシャーリー・キルダーの女性像、シャーロットの説によるシャーリー・キルダーに描かれたエミリー・ブロンテ像などを分析し、『シャーリー』におけるヴィクトリア時代の女性像を考察してみたい。

シャーロットが『シャーリー』を書き始めた年から出版に至る3年後の1849年にかけては、ブロンテ家は惨澹とした状態にあった。特に1848年9月、弟ブランウェルは結核の悪化によって世を去り、12月には妹エミリーが逝き、1849年5月には妹アンが転地先のスカーバラで容体が急変して死んでいった。長女であったシャーロットは父が70才を過ぎ病気がちであったため、ほとんど3人の弟・妹達の病床に付き添い、最後には死を看取った。その頃の有様は、ギャルケル夫人の *The Life of Charlotte Brontë* にはっきり記録されている。

I felt that house was all silent—the rooms were all empty. I remembered where the three were laid—in what narrow, dark dwellings—never more to reappear on earth.<sup>1)</sup>

これはシャーロットの親友エレン・ナッシーに贈った1849年6月の手紙の一部である。アンをスカーバラの教会墓地に仮埋葬し、やっとハワースに帰って来たが、以前家族が楽しく団欒した部屋もすっかり静まりかえっており、決して戻って来ない3人のことを思い出して悲しむシャーロットの気持ちが伝わってくる。彼女はすでに30才を越えていた。そしてこのような寂寥感に耐えながら、『シャーリー』は書き続けられていった。

シャーロットが社会的意識に目覚め、この作品を書く要因になった1つは、イギリス19世紀初めに起こった多くの機械破壊騒動であった。彼女が13才の時に入学したロウ・ヘッド校の女教師ウー女史の話に強い影響を受けたと言われる。当時ヨークシャー地方は毛織物手工業が産業の中心であった。しかしカート・ライトの毛織物機械と工場による大量生産によって、雇用を失った労働者がヨークシャーを中心に、ランカシャー、ノッティンガムなどにおいて紡績

工場の破壊騒動を起こした。特に1811年、ヨークシャーのラダイトでの暴動はその主なものであった。実際『シャーリー』においては紡績工場を経営するロバート・ムアという人物が登場する。この小説の時代背景は、ヨークシャーへの紡績工場の進出とそれに反対する民衆の姿及び破壊騒動である。

If the main incidents of *Shirley* are historical and the places described real, the characters are likewise factual, being transferred to its pages from real life with little transmutation. Liversedge, the scene of the real Luddite attack on Rawfolds (the original of Hollow's Mill), lies within a couple of miles of Roe Head, and perhaps by unconscious association, perhaps by deliberate choice, Charlotte used many Roe Head characters with little alteration in *Shirley*.<sup>2)</sup>

ラダイトの破壊騒動の起こったリバシッジは、シャーロットの通っていた学校のあるロウヘッドから数マイルである。この場所は『シャーリー』で破壊騒動のあったホロウミルの原形であり、その周辺が『シャーリー』の舞台となっているとフィリス・ベントリーは指摘している。このように『シャーリー』はイギリス産業革命のもたらした発展と急速な社会情勢の変革による矛盾と混乱を背景として描かれた。この作品はギaskell夫人の *Mary Burton* と共に、‘the first industrial novel in English Literature’<sup>3)</sup> として画期的な作品といえる。しかしながら『シャーリー』の小説のテーマは、徹底して産業歴史を追求したということではないように思われる。むしろその急速に変革されていく社会の中の人々の生きる姿にあるようだ。

『シャーリー』の小説構成の中では、人生を歩む女性達の描写が大きな要素を占めている。主に登場する女性には、キャロライン・ヘルストン、シャーリー・キールダーである。小説の中では他にホーテンス・ヘルストン、プライアー夫人なども登場するが、彼女らの生活から19世紀初期の女性像を知ることができる。キャロライン・ヘルストンは幼少の頃両親が離別し、叔父で牧師のヘルストンによって養育され、現在18才になる娘である。ヘルストンの友人ハイラム・ヨークの娘ジェシーにとってのキャロラインの印象は次のようである。

“She is nice ; she is fair... ; she never makes a bustle in moving ; she often wears a gray silk dress ; she is neat all over ; her gowns, and her shoes, and her gloves always fit her ; she is what I call a lady...”<sup>4)</sup>

可憐な娘であり、清楚で落ち着いており、‘lady’と呼ばれるにふさわしいと言っている。確かに『シャーリー』におけるキャロラインの行動は、きわめて純情なイメージで礼儀正しい女性として描かれる。例えば、彼女が従兄弟で紡績工場主となっているロバート・ムアへの淡い恋心から結婚に至る過程では、ヴィクトリア朝時代の‘lady’としての態度で交際する。キャロラインが、ロバートの姉で彼女にとって従姉妹にあたるホーテンスからフランス語の個人レッスンを受けていた頃、彼女の恋はかなえられており、幸せな気持ちでいた。しかし2つの原因によってその恋は妨げられることになる。その1つの原因は、キャロラインの叔父ヘルストンとロバートが仕事と政治的立場の相異から争うようになったからである。叔父はホロウコテッジにあるロバートの家には行かないようにとキャロラインに命じた。彼女はロバートへの恋心を叔父に告げることができず懊悩する。彼女は従順に叔父の言葉に従うが、それでもロバートが忘れが

たく思う。

Caroline meditated in her own way on the subject ; speculated on his feelings, on his life, on his fears, on his fate ; mused over the mystery of “business”, tried to comprehend more about it than had been told her...<sup>5)</sup>

ヴィクトリア朝時代の典型的な女性像は、従順であり、夫あるいは夫となる人の仕事にはあまり意見を言わず、自分の義務に従うことであった。キャロラインも表面上そのように振る舞うのであるが、心の中ではロバートとの恋を妨げる原因は何か知りたくてしかたがない。それはロバートの‘business’を知ることであり、それが社会とどのように関係があり、なぜ彼女の叔父と争わねばならないのかということである。キャロラインとロバートの恋をかなえることのできないもう1つの理由は、ロバートとシャーリーの間柄である。シャーリーは‘Esquire, lord of the manor of Briarfield’<sup>6)</sup> という肩書の示す通り、後に‘Mrs Keeldar, lady of the manor’<sup>7)</sup> となる女性であった。まだ年齢は21才になったばかりであるが、キールダー家の後継者である。シャーリー・キールダーの借地人であるロバートは、彼の紡績工場が順調に行くためにも彼女の援助が是非必要であり、キールダー家のあるフィールドヘッドをしばしば訪問する。ロバートに恋しているキャロラインは彼とシャーリーとの間柄が深まり、やがては結婚に至るのではないかとすっかり誤解してしまう。キャロラインとロバートの恋が妨げられた2つの理由は、『シャーリー』19章 A Summer Night におけるロバートの紡績工場破壊騒動以後、徐々に明らかになっていき、誤解が解ける。即ちヘルストン牧師とロバートの争いの原因は、ロバートの紡績工場が進出したことによって、今まで織物手工業に従事していた人々が職を失っていったことである。ヘルストン牧師はそのような人々に同情し、ロバートとは意見が異なったのである。そしてロバートとシャーリーの間柄は、21才のシャーリーにとってロバートは積極的に事業を押し進める青年実業家として魅力を感じたであろうが、むしろ仕事上の相手であり、後援者としての立場を貫く存在であり、不安なものではなかった。キャロラインはこの作品で、ヴィクトリア朝初期の典型的な女性像、素直で従順で社会における自分の義務を果たす女性として描かれている。世間に対しては当時の典型的な女性像である。しかし内面的には愛する人の仕事や人生を知ろうとする姿勢も窺われ、当時の女性達の中に行動には現れないが自我の目覚めた女性がいたことを理解することができる。ではシャーリー・キールダーの場合はどうか。前に述べたようにブライアフィールドの領主夫人となる女性である。故人となった父キールダーから家を受け継ぎ、21才であったが責任ある立場にいた。屋敷の管理一切を取りしきっていかなければならなかった。キャロラインはシャーリーについて次のように述べている。

She was gracefully made, and her face, too, possessed a charm as well described by the word grace as any other.<sup>8)</sup>

貴品に満ちた魅力ある女性であるが、その態度には‘something of the aspect of a grave but gallant little cavalier’<sup>9)</sup> のような雰囲気があると言っている。またシャーリー自身の次のような言葉もある。

I have been obliged to see him ; there was business to transact. Business ! Really, the word

makes we conscious I am indeed no longer a girl, but quite a woman and something more. I am an esquire! Shirley Keeldar, Esquire, ought to be my style and title. They gave me a man's name, I hold a man's position; it is enough to inspire me with a touch of manhood,...<sup>10)</sup>

彼女は21才の娘ではあったが、'Esquire' (郷士) としての威厳ある態度も時には示さなければならなかった。キャロラインは誤解していたのであるが、シャーリーは仕事に関してロバートと会う時には真剣に仕事の状況を語り、時にはロバートが驚くほど毅然とした態度で接した。特に機械破壊騒動を常に心配していた。だがその騒動は現実のものとなった。ホロウミルが武装した民衆に破壊された夜、シャーリーとキャロラインはその現場に出掛けて行った。その時も彼女の態度は毅然としており、キャロラインときわ立った対照をなした。

"Why do you cry, Lina?" asked Miss Keeldar a little sternly. "You ought to be glad instead of sorry. Robert has escaped any serious harm; he is victorious; he has been cool and brave in combat; he is now considerate in triumph. Is this a time—are these causes for weeping?" "You do not know what I have in my mind," pleaded the other.....<sup>11)</sup>

夜が明けると、破壊された工場の有様がぼんやりと見えてきた。庭には瓦礫や銃が散乱し、傷を負っている者、すでに息絶えた者達が倒れていた。その時工場を守っていた多数の兵士や男達の中からロバートが現れ、傷ついた額を洗おうとポンプのある方に近づいて来るのを2人は気付いた。キャロラインはすぐロバートの近くに走って行き、傷の手当てをしようとするが、シャーリーは強く引き止める。先程まで死を覚悟して戦っていた男達の目の前で、ロバートの浅い傷の手当てをすることがこの場にふさわしくないとシャーリーは考えたからである。ホロウミルから帰った彼女は、工場破壊のうわさの流れるフィールドヘッドの屋敷で、家庭教師のプライアー夫人に指示し、工場で戦った人々の救援に乗り出すのであった。これは事件のショックで床についたキャロラインと著しい対照をなした。この事件について織物手工業者のハイラム・ヨークがロバートを厳しく批判しても、彼女はこの青年実業家を支持した。そこにはロバートへの恋心があったとしても、それ以上にロバートが見知らぬブライヤーフィールドに来て、貧しく友達もない中で事業に取りくんだその人間としての立派さに惹かれていたからであろう。このようにシャーリーはキャロラインとは異なり、社会的視野から人物を判断できるようになっており、自主的に行動できる女性であったと言える。シャーリーの性格を示すもう2つのエピソードがある。1つは叔父ウィリアム・シンプソンの娘達との散歩の帰り猟犬に噛まれた。その犬は怒り狂ったような様子をしていたので、即座に次のことを実行した。

I walked straight into the landry, where they are ironing most of the week, now that I have so many guests in the house. While the maid was busy crimping or starching, I took an Italian iron from the fire, and applied the light scarlet glowing tip to my arm. I bored it well in; it cauterized the little wound. Then I went upstairs.<sup>12)</sup>

少しもひむことなく、真赤に焼けたコテを傷口にあて、治療のかわりにしたと言う。その後、平然と誰にもそのことを言わず、2階の自分の部屋に上がって行った。この場面ではシャーリーの性格にある激しい強い気質を読み取ることができるのではないだろうか。もう1つのエピソード

ソードは彼女が結婚相手を選ぶ時の態度である。叔父ウィリアム・シンプソンは、キールダー家の後継者のシャーリーに早く結婚してもらいたいと思い、その相手を勧める。その相手とはサムエル・フォウスロップ・ウィンである。家も近く、家柄も申し分ないとシャーリーに説くのだが、彼女は決して聞き入れない。彼女はその頃サー・フィリップ・ナンリーという格式のある家の青年に好意を持っていた。しかしある時ナンリー家に招かれ、いやな思いをする。

Moreover, old Lady Nunnely eyes her stonily from her great chair by the fire side. Her gaze said: "This woman is not of mine or my daughter's kind. I object to her as my son's wife."<sup>13)</sup>

シャーリーはこのパーティーでナンリー家は自分に合わないと感じてしまう。その後サー・フィリップ・ナンリーの手紙で、ナンリー一家が引っ越しをすることになり、ナンリー家との話はなくなってしまった。結局彼女は幼い頃フランス語を教えてもらったロバート・ムアの兄にあたるルイス・ムアと結婚することになる。シャーリーにとって彼はいかなることも打ち明けられる存在であった。彼女はキールダー家の後継者として役割を果たすためもあったが、男性と対等に人生を歩んでいる。そのため世の中での自分の責任も自覚し、明確な自分の意見を持っていた。キャロラインがヴィクトリア朝初期の典型的な女性像に近い存在であるとすれば、シャーリーはむしろ近代女性に近い女性像としてシャーロットは描いている。

*The Life of Charlotte Brontë*の著者ギaskell夫人は、シャーリー・キールダーについて次のように述べている。

The character of Shirley herself is Charlotte Brontë's representation of Emily. .... But we must remember how little we are acquainted with her, compared with that sister, who, out of her more intimate knowledge, says that she 'was genuinely good, and truly great,' and who tried to depict her character in Shirley Keekdar, as what Emily Brontë would have been, had she been in health and prosperity.<sup>14)</sup>

シャーロットは妹エミリーが健康で生活が順境であったなら、そうなるだろうという姿をシャーリー・キールダーに投影したと彼女自身が言っていたという。その視点で見れば、シャーリーにエミリーの姿が二重映しに見える。シャーリーもエミリーも犬が好きである。エミリーはキーパーという犬を可愛がっていた。シャーリーが犬に噛まれた時の場面は、そのままエミリーの逸話に一致する。またシャーリーの毅然とした態度は、エミリーが病に倒れてから死に至るまでの姿に一致する。彼女は病気が悪化してきても人に世話をしてもらうことを拒み、さらに医者に見てもらうことも望まず、薬も飲まなかったと言われる。シャーロットがギaskell夫人に述べているように、『シャーリー』において彼女は、亡き妹エミリーの思い出を投影することでエミリーの死を悼み、哀しみを耐えたのではなかろうか。

さてこれまで小説『シャーリー』の創作状況及び時代背景、さらにその時代に生涯を歩んだ2人の女性像を分析してきた。フィリス・ベントリーが指摘しているように『シャーリー』の舞台は言うに及ばず、登場人物もヨークシャーの人々が原形になっている<sup>15)</sup>ことは間違いないように思われる。キャロライン・ヘルストンとシャーリー・キールダーの生きる姿を省り見ると、産業革命という時代を背景にして、ヴィクトリア朝の厳しい女性に対する道德律の中で生

きた女性達の心情を知ることができるように思える。

### Notes

- 1) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (Smith, Elder, & Co., 1900) P. 410
- 2) Phyllis Bentley, *The Brontës* (Arther Barker Limited, 1967) P. 71
- 3) Charlotte Brontë, *Shirley* (Collins, 1953) P. 12
- 4) *Ibid.*, P. 136
- 5) *Ibid.*, P. 147
- 6) *Ibid.*, P. 173
- 7) *Ibid.*, P. 173
- 8) *Ibid.*, P. 168
- 9) *Ibid.*, P. 169
- 10) *Ibid.*, P. 170
- 11) *Ibid.*, P. 282
- 12) *Ibid.*, P. 403
- 13) *Ibid.*, P. 430
- 14) *The Life of Charlotte Brontë*, P. 414
- 15) *The Brontës*, P. 71